

# 『太平広記』 訳注

—— 卷四百二十四「龍」七 ——

## 太平広記読書会

本稿は前稿「『太平広記』 訳注 —— 卷四百二十三「龍」六一」（『国語国文学研究』第五十三号 二〇二二年）に続き、『太平広記』の卷四百二十四に収められた十五話の訳注である。『太平広記』は北宋の初めに編纂された小説を集めた類書である。本書は日本の説話文学に影響を与えたことでも知られており、その訳注を行うことは今後の中国文学・日本文学双方の研究に資するところが大きいと考える。

またこれは平成十七年七月十四日より始まった『太平広記』読書会の成果の一部でもある。当読書会は熊本大学所属の教員を中心にして、他大学の教員や学生、社会人など、所属の枠にとらわれず広く集まった有志による会であり、今後も『太平広記』を読み進めていく予定である。

前々号で記した通り、当研究会は新型コロナウイルスの世界的大流行を受けて、令和二年一月三十日開催の第二百十三回をもって休会を余儀なくされており、引き続き屋敷が個人で作業を継続している。一日も早く教育・研究活動が旧に復すること

を切に願っている。

底本、参考文献、及び字体については「『太平広記』 訳注 —— 卷四百十八「龍」一（上）——」（『国語国文学研究』第四十三号 二〇〇八年）及び「『太平広記』 訳注 —— 卷四百二十「龍」三（下）——」（『国語国文学研究』第四十八号 二〇一三年）に記した通りであるが、この度新たに発刊された以下の書も参考文献に加え、適宜参照する。

○高光・王小克主編『伝世経典 文白対照太平広記』中華書局 二〇二一年

なお作品番号は前稿の続きとする。

○59 「閻浮龍」  
〔本文〕

龍在閻浮提者五十七億。龍於瞿陁尼不降濁水。西洲人食濁則

天。單越人惡冷風、龍不發冷。於弗娑提洲、不作雷聲、不起電光。東洲惡之也。

其雷聲、兜率天作歌頌音、閻浮提作海潮音。其雨、兜率天上雨摩尼、獲世城雨美膳。海中注雨不絕如連、阿修羅中雨丘仗、閻浮提中雨清浮水。(出『西陽雜俎』)

〔訓読〕

竜の閻浮提に在る者 五十七億。竜 瞿陀尼に於いて濁水を降さず。西洲の人濁を食らば則ち天せばなり。單越の人冷風を悪めば、竜冷を發せず。弗娑提洲に於いて、雷声を作さず、電光を起こさず。東洲之を悪めばなり。

其の雷声は、兜率天歌頌の音と作り、閻浮提海潮の音と作る。其の雨は、兜率天上摩尼を雨ふらし、獲世城美膳を雨ふらす。海中雨を注ぎて絶えざること連なるが如く、阿修羅中兵仗を雨ふらし、閻浮提中清浮水を雨ふらす。

〔語注〕

○閻浮提 Jambūdvīpaの音写。琰浮洲・閻浮提韓波・南瞻部洲。意識して穢洲という。仏教の世界観では、須弥山の四方の海中にそれぞれ一洲あり、これを四洲という。閻浮提は南に位置する四洲の一つで、我々人間の住処をいう。またインドのことともいう。北魏・般若流支訳『正法念処經』卷十八「畜生品」(大正藏七二二)に「知閻浮提人不順法行、無量諸龍住於衆流。閻浮提人隨順法行、五十七億龍住於衆流。」(知る 閻浮提の人法行に順はざれば、無量の諸竜衆流に住まる。閻浮提の人法行

に隨順せば、五十七億の竜衆流に住まる、と。)とある。○瞿陀尼 『西陽雜俎』は「瞿陀尼」に作る。瞿陀尼はGodānīyaの音写。須弥山の西方にある大洲の名で、四洲の一つ。北魏・般若流支訳『正法念処經』卷十八「畜生品」(大正藏七二二)に「瞿陀尼界衆生心軟、唯一惡。以水濁因緣、食之天命。順法龍王、於彼世界、不雨濁水。瞿陀尼人、食清水故、得無煩惱。以龍力故。」(瞿陀尼界の衆生心軟しきも、唯だ一の惡む有り。水濁の因縁を以て、之を食らば命を夭す。順法の竜王、彼の世界に於いて、濁水を雨ふらさず。瞿陀尼の人、清水を食らふが故に、煩惱無きを得。竜力を以ての故なり。)とある。○單越 鬱單越のことか。鬱單越はUttarakuruの音写。須弥山の北方にあり、四洲の内最大の洲。北魏・般若流支訳『正法念処經』卷十八「畜生品」(大正藏七二二)に「知鬱單越人、若遇黑雲、冷風所吹、香花不敷、既見花合、心懷憂惱、黑雲起故。：(中略)：法行龍王、不以黑雲冷風。」(知る 鬱單越の人、若し黑雲に遇ひ、冷風の吹く所となり、香花敷かざれば、既に花の合ふを見るも、心に憂惱を懷くは、黑雲の起ころが故なり。：(中略)：法行の竜王、黑雲冷風を以てせず、と。)とある。○冷 きよらか。ここでは「冷」に同じ。○弗娑提 『西陽雜俎』は「弗婆提」に作る。弗婆提はPurvavidehaの音写。弗于逮、東勝身洲。須弥山の東方にある大洲の名で、四洲の一つ。北魏・般若流支訳『正法念処經』卷十八「畜生品」(大正藏七二二)に「知弗婆提人、若聞雷聲、若見電光、以心軟故、即得病苦。

法行龍王、於彼世界、不作雷音、不放電光、令弗婆提人、不遭病苦。龍王力故。」(知る 弗婆提の人、若し雷声を聞き、若し電光を見れば、心の軟しきを以ての故に、即ち病苦を得。法行の竜王、彼の世界に於いて、雷音を作さず、電光を放たず、弗婆提の人をして、病苦に遭はざらしむ。竜王の力の故なり。)とある。○兜率天 梵語Tushitaの音訳で、六欲天の一つ。夜摩天の上、樂變化天の下にあり、欲界六天の第四位に位する天のこと。将来仏となるべき菩薩のいる場所とされ、釈尊もここで修行し、現在は弥勒菩薩がここで説法していると説かれている。○海潮音 海の潮流の音。仏教では観世音菩薩の説法の声を象徴する。また転じて僧の読経の声。唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷五十一(大正蔵二七九)に「復た彼雲中、出種種雷音、或如龍女歌詠音、或如乾闥婆女歌詠音、或如緊那羅女歌詠音、或如大地震動聲、或如海水波潮聲、或如獸王哮吼聲、或如好鳥鳴轉聲。」(復た彼の雲中に於いて、種種の雷声を出だす。衆生の心に随ひて、皆歡喜せしむ。所謂 或いは天女の歌詠の音の如く、或いは諸天の妓樂の音の如く、或いは竜女の歌詠の音の如く、或いは乾闥婆女の歌詠の音の如く、或いは緊那羅女の歌詠の音の如く、或いは大地の震動の声の如く、或いは海水の波潮の声の如く、或いは獸王の哮吼の声の如く、或いは好鳥の鳴轉の声の如し。)とある。○摩尼 珠玉の総称。manīの音写。珠・宝・離垢・如意と漢訳する。唐・実叉難陀訳『大方広

仏華嚴經』卷十六(大正蔵二七九)に「兜率天上雨摩尼、具足種種寶莊嚴。」(兜率天上 摩尼を雨ふらし、種種の宝を具足して莊嚴なり。)とある。○獲世城 『西陽雜俎』は「護世城」に作る。護世四天王の居城か。護世四天王は仏法の四天王のこと、須弥山の中腹に居ると言われる持国天・增長天・広目天・多聞天のこと。唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷十六(大正蔵二七九)に「護世城中雨美膳、色香味具增長力。」(護世城中 美膳を雨ふらし、色香味具 長力を増す。)とある。○海中注雨不絶如連 唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷十六(大正蔵二七九)に「又復た彼大海中、注雨不絶如車軸。」(又復た彼の大海中に於いて、雨を注ぎて断えざること車軸の如し。)とある。○阿修羅中雨丘仗 底本とする中華書局点校本は「阿修中雨羅丘仗」に作り、注に「『西陽雜俎』三、阿修中雨羅丘仗句作阿修羅中雨兵仗。此有倒訛。」と言う。ここでは中華書局本の注と『西陽雜俎』によって改める。「阿修羅」はAsuraの音写。もとはインドの神の名で、神々と鬭争してやまぬ悪神とされる。仏教では仏法を守護する天竜八部衆の一体とされる。ここでは「中」とあるので阿修羅自体のことではなく、阿修羅の住まう世界のことと考える。阿修羅の住まう世界は阿修羅道といい、鬭争の世界とされる。六道の一つ。唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷十六(大正蔵二七九)に「阿脩羅中雨兵仗、摧伏一切諸怨敵。」(阿脩羅中 兵仗を雨ふらし、一切の諸怨敵を摧伏す。)とある。○清淨水 『西陽雜俎』は「清淨水」に

作る。唐・実叉難陀訳『大方広仏華嚴經』卷七（大正藏二七八）に「閻浮提雨清淨水、柔軟悅澤常應時。」（閻浮提 清淨水を雨ふらし、柔軟悦沢 常に時に応ず。）とある。○『酉陽雜俎』晚唐の段成式（？～八六三）が編纂した小説集。前集二十巻、続集十巻より成る。この話は前集卷三「貝」に収められている。

〔訳文〕

南の閻浮提に住む竜は五十七億頭いる。竜は西の翟陁尼洲では濁った水を降らせない。西洲の人が濁ったものを食べたらず死ぬからである。北の単越洲の人は冷たい風を嫌うので、竜は冷たい風を吹かせない。東の弗姿提洲では雷鳴も電光も起こさない。東洲の人が嫌うからである。

竜が起こす雷鳴は、兜率天では徳をたたえろめたい歌となり、閻浮提では海潮音となる。その雨は兜率天では宝珠の雨となり、四天王の城では御馳走の雨となる。海では雨が繋がっているかのように降り続け、阿修羅道では武器の雨となり、閻浮提では清浮水の雨となる。

○60 「呉山人」

〔本文〕

隴州呉山縣、有一人乘白馬夜行。凡縣人皆夢之、語曰、「我欲移居。暫假爾牛。」言訖即過。其夕、數百家牛、及明、皆被體汗流如水。

於縣南山曲出一湫。方圓百餘步。里人以此湫因牛而遷。謂之

特牛湫也。（出『獨異志』）

〔訓読〕

隴州呉山県に、一人の白馬に乗りて夜に行く有り。凡そ県人皆之を夢みるに、語りて曰く、「我 居を移さんと欲す。暫く爾が牛を仮らん」と。言ひ訖はりて即ち過ぐ。其の夕べ、數百家の牛、明に及ぶまで、皆 体を被ひて 汗流ること水の如し。

県の南山の曲まがに於いて一湫を出だす。方圓 百余歩。里人おもへらく此の湫牛に因りて遷ると。之を特牛湫と謂ふなり。

〔語注〕

○隴州 現在の陝西省宝鶏市隴県一帶。○呉山縣 現在の陝西省宝鶏市千陽県の西南。○湫 池。水たまり。○特牛湫 未詳。「特牛」は雄牛のこと。○『獨異志』 唐代に編まれた志怪小説集。作者については李伉、李元、李元、李元など諸説あるが、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社 一九九三年）では李伉が正しいとされている。『新唐書』卷五十九「芸文志三」によると、もと十巻であったが、今、三巻が残るだけである。内容は幅広く、歴代の怪異雑事から民間伝説にまで及んでいる。この話は通行本には収められていない。

〔訳文〕

隴州呉山県で、県の住人全てが白馬に乗って夜に行く人の夢を見た。白馬に乗った人は「私は引越しようと思う。ついではおまえ達の牛を少々貸してもらおう。」と告げ、言い終わ

ると通り過ぎていった。その日の夕べ、数百軒の家の牛が朝まで全身汗びっしょりになった。

梶の南山の隈に池が一つ出現した。周囲は百余歩（一步＝五五五五）程であった。里の人々は、この池は牛によって移動してきたのだと考え、この池を「特牛湫」（雄牛の池）と呼んだ。

### ○61「白將軍」

#### 〔本文〕

僧元可言、近傳有白將軍者嘗於曲江洗馬、馬忽跳出驚走。前足有物、色白如衣帶、縈繞數匝。遽令鮮之、血流數升。白異之、遂封紙帖中、藏於衣箱。

一日、送客至澹水、出示諸客。客曰、「盍以水試之。」白以劍劃地成窠、置蟲於中、沃盥其上。少頃、蟲蠕而長、窠中泉湧、倏忽自盤若一席。有黑氣如香煙、徑出檐外。衆懼曰、「必龍也。」遂急歸。未數里、風雨驟至、大震數聲。（出『西陽雜俎』）

#### 〔訓読〕

僧元可言ふ、近伝に白將軍なる者有り嘗て曲江に於いて馬を洗ふに、馬忽ち跳ね出でて驚走す。前足に物有り、色白くして衣帯の如く、縈繞すること數匝。遽かに之を鮮さしむるに、血流ること數升。白之を異とし、遂に紙帖中に封じ、衣箱に藏す。

一日、客を送りて澹水に至るに、出だして諸客に示す。客曰

く、「盍ぞ水を以て之に試さざる」と。白劍を以て地を劃ちて窠と成し、蟲を中に置き、其の上に沃盥す。少頃にして、蟲蠕として長じ、窠中に泉湧き、倏忽として自ら盤すること一席の若し。黒氣の香煙の如き有り、徑ちに檐外に出づ。衆懼れて曰く、「必ず竜ならん」と。遂に急ぎ帰る。未だ數里ならずして、風雨驟かに至り、大いに震ふこと數聲。

#### 〔語注〕

○僧元可 『西陽雜俎』は「僧無可」に作る。無可は俗姓は賈、范陽の人。賈島の從弟に当たると。『唐詩紀事』卷七十四、「唐才子伝』卷六に記事がある。○白將軍 未詳。○曲江 池の名。曲江池ともいう。長安の東南隅に位置した。漢の武帝が宜春苑をここに作り、水流が「之」の形に屈曲しているから名付けた。

○鮮 殺す。『尚書大伝』卷二に「是離逢非沔、維鮮之功。」（是離逢は沔に非ず、維れ鮮の功なり。）とあり、鄭玄注に「鮮、殺也。」（鮮は、殺なり。）とある。『西陽雜俎』は「解」に作る。○澹水 川の名。関中八川の一つ。陝西省藍田県の西南に源を發し、渭水に注ぐ。○沃盥 水を注ぐ。○『西陽雜俎』 晚唐の段成式（？～八六三）が編纂した小説集。前集二十卷、続集十卷より成る。この話は通行本の前集卷十五「諸泉記」下に収められている。

#### 〔訳文〕

僧の元可の話では、近頃伝えられることによると、白將軍がかつて曲江で馬を洗っていると、馬が突然飛び跳ねて驚き駆け

回った。前足に白い帯のような物が何重にも巻き付いていた。すぐにそれを殺させると、血が数升（二升〇・五九四四）流れた。白將軍は不思議に思い、そこでこの白い物を紙の帳面に挟み、衣装箱に入れておいた。

ある日、客人を瀧水まで見送った時、これを取り出して客人達に見せた。客人は「水をこれに掛けてみてはどうか。」と言った。白將軍は剣で地面を区切って穴を掘り、虫の中に置いてその上に水を注ぎかけた。しばらくすると、虫はうごめいて大きくなり、穴の中には泉が湧き出したかと思うと、たちまち敷物くらいの大ささのとぐるを巻き、香煙のような黒い気がまっすぐ軒の外に出て行った。人々は恐れて、「きつと竜に違いない。」といい、そのまま急いで帰ったが、数里（一里〇五九九八m）も行かない内に風や雨が急に起こり、大きな音が何度も鳴り響いた。

### 〇62「温媪」

〔本文〕

温媪者、即康州悅城縣孀婦也。績布爲業。嘗於野岸拾菜、見沙草中有五卵。遂收歸、置績筐中。不數日、忽見五小蛇。殼一斑四青。遂送於江次。固無意望報也。

媪常濯浣於江邊。忽一日、見魚在水跳躍、戲於媪前。自爾爲常。漸有知者、鄉里咸爲龍之母、敬而事之。或詢以災福、亦言多徵應。自是媪亦漸豐足。

朝廷知之、遣使徵入京師。至全義嶺、有疾、却返悅城而卒。鄉里共葬之江東岸。忽一夕、天地晦暝、風雨隨作。及明、移其冢於西、而草木悉於西岸。（出『嶺表錄異』）

〔訓詁〕

温媪は、即ち康州悅城県の孀婦なり。布を績つむぎて業と爲す。嘗て野岸に於いて菜を拾ふに、沙草中に五卵有るを見る。遂に収めて帰り、績筐せきくわうの中に置く。数日ならずして、忽ち五小蛇を見る。殼一は斑四は青。遂に江次に送る。固もとより報ひを意望する無きなり。

媪常に江辺に濯たく浣たす。忽ち一日、魚の水に在りて跳躍し、媪の前に戯るるを見る。爾こゝより常と爲る。漸く知る者有り、郷里な咸竜の母と爲し、敬ひて之に事ふ。或いは詢とふに災福を以てせば、亦た言に徵応多し。是より媪も亦た漸く豊足す。

朝廷之を知り、使ひを遣はして徵めして京師に入らしむ。全義嶺に至り、疾有り、却つて悅城に返りて卒す。郷里共に之を江の東岸に葬るに、忽ち一夕、天地晦暝し、風雨随ひて作おこる。明に及び、其の冢を西に移せば、草木悉く西岸に於いてす。

〔語注〕

〇温媪 未詳。〇康州 現在の広東省肇慶市南部と雲浮市北部にまたがる地域。〇悅城縣 現在の広東省肇慶市に位置する県。〇次 そば。〇全義嶺 越城嶺のこと。南嶺山脈（五嶺山脈）の一つ。广西チワン族自治区および広東省の北部、湖南省および

び江西省の南部を走る南嶺山脈の一番西に位置する。○『嶺表録異』三卷（『四庫全書』本）。唐の劉恂の撰。唐代南海の氣候・風俗・地理・交通などを記している。原書は逸しており、『永樂大典』その他から逸文を集めたものがある。通行本では卷上に取められている。

### 〔訳文〕

温媼は康州悦城県の寡婦である。糸を續いで布を織ることを仕事としていた。かつて郊外の川岸で野草を摘んでいたところ、砂辺の草叢の中に卵が五つあるのを見つけた。そこで持って帰り、糸を入れる箱の中に入れておいた。数日経たない内に、突然小蛇が五匹生まれた。表皮は一匹は斑で四匹は青かった。そこで川の側に運んだ。もともとお返しを望んでいた訳では無かった。

温媼はいつも川のとりで洗濯をしていた。ある日、魚が川の中で飛び跳ね、温媼の前で戯れることがあったが、それからはいつものこととなった。徐々にそのことが知られるようになり、郷里の人々は皆彼女を竜の母として敬い仕えた。彼女に將來の災厄や幸福を尋ねると、その返答は当たることが多かった。それから温媼は段々裕福になっていった。

朝廷はその事を知って、使者を派遣して彼女を都に召し出した。しかし全義嶺まで行ったところで病になり、悦城まで引き返して亡くなった。郷里の人々は彼女を川の東岸に葬ったが、突然ある晩、天地が真っ暗になり、続いて風や雨が沸き起こっ

た。明け方になって彼女の墓を西岸に移すと、草や木は皆西岸に生えるようになった。

### ○63 「柳子華」

#### 〔本文〕

柳子華、唐時爲城都令。一旦方午、忽有犢車一乘。前後女騎導從徑入廳事、使一介告柳云、「龍女且來矣。」

俄而下車。左右扶衛昇階、與子華相見。云、「宿命與君合爲匹偶。」因止、命酒樂極懽。成禮而去。自是往復爲常、遠近咸知之。

子華罷秩、不知所之。俗云、「入龍宮、得水仙矣。」（原闕出處。明鈔本作出『劇談錄』）

#### 〔訓読〕

柳子華は、唐時 城都令ま爲り。一旦 方に午なるに、忽ち犢車一乗有り。前後の女騎導從 徑なだちに庁事に入り、一介をして柳に告げしめて云ふ、「竜女 且またに來たらんとす」と。

俄かにして車より下る。左右 扶衛して階を昇らしめ、子華と相見ゆ。云ふ、「宿命 君と合あひに匹偶と爲るべし」と。因りて止まり、酒樂を命じて懽よろこびを極め、礼を成して去る。是より往復 常と爲り、遠近 咸みな之を知る。

子華 秩を罷め、之ゆく所を知らず。俗に云ふ、「竜宮に入りて、水仙を得たり」と。

〔語注〕

○柳子華 生卒年未詳。柳公綽の伯父。嚴武によって西蜀判官として召され、さらに成都令、池州刺史に遷る。代宗は彼を京兆少尹に任命しようとしたが、京兆尹にその剛直さを疎まれて就任できなかった。その後いくつかの官職を歴任し、自らの死期を悟って自らの墓誌銘を著したという。『旧唐書』卷百七十九、『新唐書』卷百六十五に伝がある。○城都令 都の令史のことか。令史は尚書郎や御史大夫の属官で、文書などを掌る下級の事務官。或いは「成都令」の誤りか。『旧唐書』卷百六十五「柳子華伝」に「公綽伯父子華、永泰初、爲嚴武西蜀判官、奏爲成都令。」（公綽の伯父 子華、永泰の初め、嚴武の西蜀判官と爲り、奏せられて成都令と爲る。）とある。そうであれば、この話は永泰年間（七六五〜七六六）の初め頃の話ということになる。○犢車 子牛に牽かせる車。○一介 一人の間。特に使者や僕役を指す。○『劇談録』 唐・康駟の撰。康駟は字は駕言、池州の人。乾符五年（八七八）の進士で、翌乾符六年（八七九）には博学宏詞科に及第している。『劇談録』序文に拠れば、康駟がこの書を記したのは乾寧二年（八九五）のこと。通行本は二卷だが、『崇文総目』『宋史』藝文志等は二卷、『新唐書』藝文志及び『郡齋讀書志』等は三卷とする。『太平広記』に三十三話収められている。この話は通行本には収められていない。

〔訳文〕

柳子華は、唐代の城都令である。ある日のちようど午の時（正午）頃、突然牛車が一台現れた。前後に付き従っていた騎馬の女性やお付きの者達が真つ直ぐ役所に入ってきて、下僕を通じて柳子華に「童女様がお出でになられる。」と伝えた。

突然童女が車から下りてきた。左右の者が助けて階段を昇らせ、柳子華と対面して、「あなたとは連れ合いになる運命なのです。」と言った。そしてそこに留まって酒と音楽を命じて大いに楽しみ、儀式が終わると去って行った。それから童女はいつもやって来ては去るようになり、遠近の者は皆その事を知っていた。

柳子華は役人を辞め、どこに行ったのかは分からない。世間では「彼は童宮に入つて水中の神仙となったのだ。」と言っていた。

○64「斑石」

〔本文〕

京邑有一士子。因山行、拾得一石子。青赤斑爛、大如鷄子。甚異之、置巾箱中五六年。因與嬰兒弄、遂失之。

數日、晝忽風雨暝晦、庭前樹下、降水不絶如瀑布状。人咸異其故。風雨息、樹下忽見此石已破。中如鷄卵出殼焉。乃知爲龍子也。（出『原化記』）

〔訓詁〕

京邑に一石子有り。山行するに因りて、拾ひて一石子を得たり。青赤斑斕にして、大なること鷄子の如し。甚だ之を異とし、巾箱中に置くこと五六年。因りて嬰兒に与へて弄ばしむるに、遂に之を失ふ。

数日にして、昼忽ち風雨暝晦し、庭前の樹下、降水絶えずして瀑布の状の如し。人咸其の故を異とす。風雨息み、樹下に忽ち此の石の已に破れたるを見る。中鷄卵の出殻の如し。乃ち童子為るを知るなり。

〔語注〕

○巾箱 ハンカチなどを入れる布張りの小箱。○『原化記』 晩唐・皇甫氏撰。皇甫氏は名は伝わらず、洞庭子と号した。既に散佚しており、『太平広記』を中心に六十数条の佚文が残されている。

〔訳文〕

都のある士人が山歩きしている時、石ころを一つ拾った。青と赤の斑で、大きさは鷄卵くらいだった。男はこれを珍しいものだと思い、五、六年程小箱の中に入れておいた。そして赤ん坊に与えておもちゃにさせていたところ、そのままどこかに行ってしまった。

数日後、昼間に突然急に風や雨が沸き起こって真っ暗になり、庭の前の樹の辺りに滝のような雨が降り続いた。人々は皆どういふことか不思議に思った。風と雨が止むと、樹の辺りにふと

この石が割れているのを見つけた。中は雛が生まれた後の鷄卵の殻のようであった。そこでやっとこれは竜の卵であったことが分かったのであった。

○65 「張公洞」

〔本文〕

義興縣山水秀絶、張公洞尤奇麗。里人云、張道陵修行之所也。中有洞壑、衆未敢入。

土氓姚生習道、挈杖瓶火、負囊以入。約行數百歩、漸漸明朗。雲樹依稀、近通歩武。又十餘里、見二道士對奕。曰、「何人。焉得來此。」具言始末。曰、「大志之士也。」姚生餒甚。因求食。旁有青泥數斗。(斗原作十。據明鈔本改。)道士指曰、「可飡此。」試探咀嚼、覺芳馨。食之遂飽。道士曰、「爾可去。慎勿語世人。」再拜而返。

密懷其餘、以訪市肆。偶胡賈見、驚曰、「此龍食也。何方而得。」乃述其事、俱往尋之、但黑巨穴、不復有路。青泥出外、已硬如石、不可復食。(出『逸史』)

〔訓詁〕

義興県は山水秀絶にして、張公洞尤も奇麗なり。里人云ふ、張道陵修行の所なりと。中に洞壑有り、衆未だ敢へて入らず。

土氓の姚生、道を習ひ、杖を挈げ火を瓶にし、囊を負ひて以て入る。約ね行くこと數百歩、漸漸として明朗たり。雲樹依

稀として、近づけば歩武を通ず。又た十余里にして、二道士の対突するを見る。曰く、「何人ぞ。焉ぞ此に來たるを得たるか」と。具に始末を言ふ。曰く、「大志の士なり」と。姚生餒うることを甚だし。因りて食を求む。旁に青泥数斗有り。道士指して曰く、「此を喰らふべし」と。試みに探りて咀嚼すれば、芳馨なるを覚ゆ。之を食らひて遂に飽く。道士曰く、「爾去るべし。慎みて世人に語る勿かれ」と。再拝して返る。

密かに其の余を懐にし、以て市肆を訪ぬ。偶たま胡賈見て、驚きて曰く、「此竜の食なり。何れの方ありて得たるか」と。乃ち其の事を述べ、俱に往きて之を尋ぬるも、但だ黒巨穴あるのみにして、復た路有らず。青泥外に出づれば、已に硬きこと石の如く、復た食らふべからず。

#### 〔語注〕

○義興縣 太湖の西側に在った県名。現在の江蘇省宜興市。○張公洞 道教の聖地の一つ。唐・司馬承禎『天地宮府図』「七十二福地」(『雲笈七籤』卷二十七「洞天福地」部)に「第五十九張公洞 在常州宜興縣、真人康桑治之。」(第五十九張公洞 常州宜興県に在り、真人康桑之を治む。)とある。南唐・沈汾『統仙伝』卷中「劉商」に見える他に、『全唐詩』に「遊張公洞」「題張公洞」と題した詩が四首収められており、唐代には神仙の住まう場所として有名であつたらしい。○張道陵 沛国豊の人、張陵のこと。蜀の鶴鳴山に入って仙道を学び、太平道とともに道教の源流の一つに数えられる天師道を興した。その

後天師道は子の張衡、孫の張魯と伝えられ、竜虎山に移つて道教の正一派となつた。彼の伝記は『神仙伝』巻四に収められているが、この張公洞のことは記されていない。○土氓「氓」は庶民の意。土地の民のことを言うか。○依稀 ぼんやりとして明らかではない様。○歩武 歩み。「武」は足跡。○對突 囲碁の対局をすること。「奕」は囲碁。○青泥 青い泥。五百年に一度神山から流れ出す石髓であるともいう。晋・葛洪『神仙伝』巻六「王烈」(増訂漢魏叢書本)に「石中有一穴口、經闊尺許。中有青泥流出如髓。烈取泥試丸之、須臾成石。如投熱蠟之状、隨手堅凝。氣如粳米飯、嚼之亦然。」(石中に一穴口有り、經闊尺許。中に青泥有りて流出すること髓の如し。烈泥を取りて試みに之を丸むれば、須臾にして石と成る。熱蠟を投ずるの状の如く、手に隨ひて堅凝す。氣 粳米の飯の如く、之を嚼むも亦た然り。)とある。○『逸史』 晩唐・盧肇(八二〇〜八七九?)の編纂した小説集。もと三巻とされるが、今に伝わるのは輯本三巻のみ。

#### 〔訳文〕

義興県は風光明媚なところで、中でも張公洞が最も素晴らしい。土地の人々はここは張道陵が修行した所であると言う。中には深い谷があり、人々が入ろうとはしない。

現地の民姚生は道を学び、杖を手に火を瓶に入れ、袋を背にして入つていった。数百歩(一歩＝一・五五五m)程行くと、段々明るくなつてきた。雲がかかった高い木がぼんやりと見え、

近づく道が通っていた。また十余里（一里＝五五九・八m）行くと、二人の道士が碁を打っていた。道士達は「何者だ。何故ここに來ることができたのだ。」と言った。姚生が事の次第を詳しく話すと、道士は「大志を抱く者なのだ。」と言った。姚生は非常に空腹だったので、食べ物求めた。側には青い泥が数斗（一斗＝五・九四四一）あり、道士はそれを指して「これを食べるがよい。」と言った。試しに探り取って口にしてみると、とても良い香りがした。それを食べてお腹一杯になった。道士が「そなたは帰るがよい。決して世俗の者に語ってはならぬぞ。」と言ったので、姚生は再拜して帰った。

姚生はこっそり青い泥の残りを入れて帰り、市場を訪れた。偶然胡人の商人が見かけて、「これは竜の食べ物ではありませんか。如何にして入手なさったのですか。」と驚いた。そこで張公洞のことを話し、一緒に探しに行ったが、暗くて大きな穴があるだけで、もう道は無かった。青い泥は洞窟の外に出ると石のように堅くなってしまい、もう食べることができなかつた。

## ○66 「五臺山池」

〔本文〕

五臺山北臺下有龍池約二畝有餘。佛經云、「禁五百毒龍之所。」每至亭午、昏霧暫開、比丘及淨行居士方可一睹。比丘尼及女子近、即雷電風雨時大作。如近池、必爲毒氣所吸、遂巡而沒。（出

『傳奇』明鈔本作出『傳載』）

〔訓読〕

五臺山の北臺の下に竜池有り 約おほむ二畝有餘。仏經に云ふ、「五百毒竜を禁ずるの所」と。亭午に至る毎に、昏霧暫く開き、比丘及び淨行居士方に一たび睹るべし。比丘尼及び女子近づかば、即ち雷電風雨時に大いに作る。如し池に近づかば、必ず毒氣の吸はしむる所と爲り、遂巡にして没す。

〔語注〕

○五臺山 山名。山西省忻州市五台县にある靈山。五つの峰があることから名付けられた。そのなかでも北臺が一番高く、海拔三〇五八mである。○亭午 正午。○比丘及淨行居士 「比丘」は出家した男性僧侶、「居士」は在家の男性信者。○比丘尼 出家した女性僧侶。尼。○『傳奇』 晚唐・裴鉞が編纂した小説集。既に佚して伝わらない。「崑崙奴」「聶隱娘」などの話で知られる。この話は通行本には収められていない。○『傳載』 作者未詳。唐の武徳（六一八～六二六）から元和（八〇六～八二〇）までの間の雑事・軼事を記している。『太平広記』には三十六話程が収録されている。この話は通行本に収められている。

〔訳文〕

五臺山の北臺の下に竜池がある。広さはおよそ二畝（三・六四a）程。仏典によれば、五百頭の毒竜を封印したところだといふ。午の時（正午）頃になると、立ちこめた霧が少しの間晴

れて、男性の僧侶と信者は丁度その時見ることが出来る。しかし尼と女性が近づくと、雷や風や雨などが激しく起こる。もし池に近づくと、必ず毒気を吸わされてしまい、まもなく死んでしまふ。

### ○67「張老」

〔本文〕

荆湘有僧寺背山近水、水中有龍。時或雷風大作、損壞樹木。

寺中有撞鐘張老者、術士也。而僧不知。

張老惡此龍損物、欲禁殺之、密爲法。此龍已知、化爲人、潛告僧曰、「某實龍也。往此水多年。或因出、風雨損物。爲張老所禁、性命危急。非和尚救之不可。倘救其命、奉一寶珠、以伸報答、某即移於別處。」僧諾之。

夜喚張老、求釋之。張老曰、「和尚莫受此龍獻珠否。此龍甚窮、唯有此珠、性又悖惡。今若受珠、他時悔無及。」僧不之信、曰、「君但爲我放之。」張老不得已、乃放。龍夜後送珠於僧、而移出潭水。張老亦辭僧去。

後數日、忽大雷雨、壞此僧舍、奪其珠。果如張老之言。（出『原化記』）

〔訓読〕

荆湘に僧寺有り 山を背にして水に近く、水中に竜有り。時に或いは雷風大いに作り、樹木を損壞す。寺中に撞鐘の張老なる者有り、術士なり。而るに僧知らず。

張老 此の竜の物を損なふを惡み、禁じて之を殺さんと欲し、密かに法を爲す。此の竜 已に知り、化して人と爲り、潜かに僧に告げて曰く、「某 実に竜なり。此の水に住まること多年。或いは出づるに因りて、風雨物を損なふ。張老の禁ずる所と爲り、性命 危急なり。和尚に非ずんば之を救ふは可ならず。倘し其の命を救はば、一宝珠を奉り、以て報答を伸べ、某即ち別処に移らん」と。僧 之を諾す。

夜 張老を喚び、之を釈さんことを求む。張老曰く、「和尚此の竜の珠を獻ずるを受くる莫きや否や。此の竜 甚だ窮し、唯だ此の珠有るも、性 又た悖惡なり。今 若し珠を受けば、他時 悔ゆるも及ぶ無からん」と。僧 之を信ぜず、曰く、「君 但だ我が爲に之を放せ」と。張老 已むを得ず、乃ち放す。竜 夜後 珠を僧に送り、而して移りて潭水を出づ。張老も亦た僧に辭して去る。

後數日、忽ち大いに雷雨あり、此の僧舍を壞し、其の珠を奪ふ。果たして張老の言の如し。

〔語注〕

○荆湘 荆州と湘州のこと。荆州は現在の湖北省荆州市、荆門市一帯。湘州は南北朝時代の州の名で、現在の湖南省南部から広東省北部一帯。兩者をあわせると、概ね洞庭湖一帯の地。○禁 禁呪。存在や変化を禁じる術。『神仙伝』卷七「樊夫人」に「因俱坐堂上、綱作火燒客碓屋、從東起。夫人禁之、即滅。」（因りて俱に堂上に坐し、綱火を作して客碓屋を燒き、東よ

り起こる。夫人之を禁ずれば、即ち滅す。」とある。○『原化記』 晩唐・皇甫氏撰。皇甫氏は名は伝わらず、洞庭子と号した。既に散佚しており、『太平広記』を中心に六十数条の佚文が残されている。

### 〔訳文〕

洞庭湖の辺りに寺があった。この寺は山を背にして川に近く、川の中には竜がいた。この竜は時に雷や大風を起こして樹木を傷つけていた。寺に鐘撞きの張という老人がいた。この人は術士であったが、僧はそのことを知らなかった。

張老はこの竜が物を壊すのを快く思わず、禁呪によって殺そうと考え、密かに術を行った。この竜はそれに気づき、人に姿を変えるところり僧のところに現れ、「私は確かに竜です。

この川に長らく住み着いております。時には姿を現した際、それに伴う風や雨によって物を傷つけることがあります。張老に禁呪を行われたため、命が危のうございませぬ。和尚様でなくては私を救うことはできません。もし我が命をお救いくださいましたならば、宝珠を一つ奉ってお礼申し上げ、私はすぐにも他所へ移りましょう。」と言った。僧は承諾した。

その夜、僧は張老を呼び、竜を許してやるように言った。張老は「和尚様はこの竜が宝珠を献上するというのを受け入れたのでしょうか。この竜は進退窮まっております、その珠を持っているとはいっても、その性質は意地汚いのです。今もし宝珠を受ければ、後悔しても間に合いませんよ。」と言った。しかし僧

は信用せず、「とにかく私のために竜を許してやれ。」と言った。張老はやむを得ず、許してしまった。竜は夜に宝珠を僧に贈ると、川から出て行った。張老も僧に別れを告げて寺から出て行った。

数日後、突然ひどい雷雨が起こつてこの寺を破壊し、宝珠を奪つていった。確かに張老の言つたとおりであった。

### ○68 「費鷄師」

#### 〔本文〕

蜀川有一費鷄師者、善知將來之事、而亦能爲人禳救。多在邛州、蜀人皆神之。

時有一僧言、往者雙流縣保唐寺、寺有張二師者。因巡行僧房、見有空院、將欲住持。率家人掃灑之際、於柱上得一小瓶子。二師觀之、見一蛇在瓶內、覆瓶出之。約長一尺、文彩斑駁、五色備具。以杖觸之、隨手而長。衆悉驚異。二師令一物挾之、送於寺外。當携撥之際、隨觸隨大、以至丈餘、如屋椽矣。二人擔之方舉。送者愈懼、觀者隨而益多。距寺約二三里、所在撼動之時、增長不已。衆益懼、遂擊傷、至於死。

明日、此寺院中有虹蜺、亭午時下寺中。僧有事至臨邛、見鷄師說之。鷄師曰、「殺龍女矣。張二師與汝寺之僧徒、皆當死乎。」後卒如其言。他應驗不可勝紀。竟不知是何(何字原闕。據陳校本補。)術。

韋絢長兄爲杜元穎從事。其弟妹皆識費師、於京中已悉知有此

事。自到、即詢訪鷄師之術。凡有病者來告、鷄師即抱一鷄而往。及其門、乃持呪其鷄、令人入、抵病者之所。鷄入而死、病者差。鷄出則病者不起矣。時人遂號爲費鷄師。

又以石子置病者腹上、作法結印。其石子斷者、其人亦不起也。又能書符。先焚符爲灰、和湯水、與人吞之。俄復吐出、其符宛然如不燒。

又云、城南建昌橋下、其南岸先有龍窟。歲常損人、至有連馬而溺者。如有攫拏於水。當草率時、前後運石、凡幾萬數。頃之、石復失焉。後命道士投簡于內、以土築之、方滿。自此之後、龍窟移于建昌寺佛殿下、與西廊龍井通焉。而建昌橋下、往往損人而不甚也。詢問吏卒、往時人馬溺於其間、良久口浮皆白。其血被吮吸已盡、而尸乃出焉。(出『戎幕閑談』)

#### 〔訓誦〕

蜀川に一費鷄師なる者有り、善く将来の事を知り、而して亦た能く人の爲に禳救す。多く邛州に在り、蜀人皆之を神とす。

時に一僧有りて言ふ、往者に双流県保唐寺あり、寺に張二師なる者有り。僧房を巡行するに因りて、空院有るを見、將に住持せんと欲す。家人を率ゐて掃灑するの際、柱上に於いて一小瓶子を得たり。二師之を觀るに、一蛇の瓶内に在るを見、瓶子を覆して之を出だす。約ね長一尺、文彩斑駁あり、五色備に具ふ。杖を以て之に觸るれば、手に隨ひて長し。衆悉く驚異す。二師一物をして之を挟み、寺外に送らしむ。携掇の際

に当たりて、隨ひて觸れ隨ひて大にして、以て丈余に至り、屋椽の如し。二人之を担ひて挙がる。送る者愈いよ懼れ、觀る者隨ひて益ます多し。寺を距つること約ね二三里、所在撼動の時、増長して已まず。衆益ます懼れ、遂に撃傷し、死に至らしむ。

明日、此の寺院中に虹蜺有り、亭午の時寺中に下る。僧事有りて臨邛に至り、鷄師に見えて之を説く。鷄師曰く、「竜女を殺すか。張二師と汝が寺の僧徒と、皆当に死すべきか」と。後卒に其の言の如し。他の応驗紀すに勝ふべからず。竟には何れの術なるかを知らず。

韋絢の長兄杜元穎の従事と爲る。其の弟妹皆費師を識れば、京中に於いて已に悉く此の事有るを知る。自ら到り、即ち鷄師の術を詢訪す。凡そ病者の來り告ぐる有らば、鷄師即ち一鷄を抱きて往く。其の門に及び、乃ち持ちて其の鷄に呪し、内に入りて、病者の所に抵らしむ。鷄入りて死せば、病者差ゆ。鷄出では則ち病者起たず。時人遂に号して費鷄師と爲す。

又た石子を以て病者の腹上に置き、法を作し印を結ぶ。其の石子断たるれば、其の人も亦た起きざるなり。又た能く符を書す。先づ符を焚きて灰と爲し、湯水と和し、人に与へて之を吞ましむ。俄かに復た吐き出だせば、其の符宛然として燒かざるが如し。

又た云ふ、城南の建昌橋の下、其の南岸先に竜窟有り。歲常に人を損なひ、馬を連ねて溺るる者有るに至る。水に攫拏す

る有るが如し。韋皋の時に当たり、前後 石を運ぶこと、凡そ幾万數。之を頃くして、石復た失ふ。後 道士に命じて簡を内に投ぜしめ、土を以て之を築き、方めて満つ。此よりの後、竜窟 建昌寺仏殿の下に移り、西廊の竜井と通ず。而して建昌橋の下、往往にして人を損なふも甚だしからざるなり。吏卒に詢問するに、往時 人馬 其の間に溺れば、良や久しくして 尸浮かびて皆白し。其の血 吮吸せられて已に尽き、而して尸乃ち出づ、と。

〔語注〕

○蜀川 蜀に同じ。広く現在の四川省一帯を指す。○費鷄師 『酉陽雜俎』前集卷五「怪術」に「蜀有費鷄師、目赤無黑睛。本濮人也。成式長慶初見之、已年七十餘。」(蜀に費鷄師有り、目赤くして黒睛無し。本濮の人なり。成式長慶の初め之に見え、已に年七十餘。)とあり、長慶年間(八二二～八二四)の初めにはすでに七十歳余りであったという。○邛州 現在の四川省邛崃市一帯に在った州。○雙流縣 現在の四川省成都市双流区。○保唐寺 成都に在った寺院の名。唐・撰述者未詳『歷代法宝記』(大正藏二〇七五)に「劍南城都府大曆保唐寺無住和上、每爲學道四衆百千萬人。」(劍南城都府大曆保唐寺の無住和上、道を学ぶを爲す毎に四衆百千万人。)とある。○所在 ところどころ、そこかしこ。○虹蜺 にじ。竜の一種で、色の鮮明な主虹を雄として虹、淡い副虹を雌として蜺という。○臨邛 現在の四川省成都市邛崃市。○韋絢 八〇二～?。字は文

明。元の名は昶。順宗朝の宰相韋執誼の子。この話の出典である『戎幕閑談』の著者。幼くして劉禹錫に学び、その事を『劉賓客嘉話録』に記した。大和四年(八三〇)、李德裕が成都尹、劍南西川節度副大使となった際に節度巡官として召された。六年(八三二)に李德裕が兵部尚書として中央に戻った際、韋絢も中央に戻ったと思われる。開成年間(八三六～八四〇)には左補闕から起居舍人に遷り、員外郎、江陵少尹、河南少尹を経て咸通年間(八六〇～八七四)に義武軍節度使となった。○杜元穎 七六九～八三二。元和年間(八〇六～八二〇)、左拾遺右補闕となり、召されて翰林学士となった。その後穆宗が即位すると司勳員外郎知制誥から中書舍人、戸部侍郎となった。長慶三年(八二三)に劍南西川節度使に遷った。敬宗におもねって収奪が激しかったせいで州民に恨まれた。大和三年(八二九)に南詔蛮に侵入され、かろうじて撃退したが邵州刺史に左遷され、配所で没した。郁賢皓『唐刺史考全編』(安徽大学出版社二〇〇〇年)に拠れば、杜元穎が劍南西川節度使であったのは長慶三年(八二三)から大和三年(八二九)のこと。前項「韋絢」注とあわせると、この話は大和三年か四年頃の話ということになるか。○從事 藩鎮の幕僚のこと。○建昌橋 橋の名。晋・常璩『華陽国志』卷三「蜀志」に「長老傳言、李冰造七橋、上應七星。」(長老 伝へて言ふ、李冰七橋を造り、上七星に応ずと。)とあり、かつて秦の李冰が北斗七星に準えて成都に七つの橋を作ったと言ひ、李膺『益州記』(『大清一統志』卷二

百九十三「成都府」所引)には「一長星橋、今名萬里。二員星橋、今名安樂。三璣星橋、今名建昌。四夷里橋、今名笮橋。五尾星橋、今名禪尼。六冲星橋、今名永平。七曲星橋、今名昇仙橋。」(一は長星橋、今名は万里。二は員星橋、今名は安樂。三は璣星橋、今名は建昌。四は夷里橋、今名は笮橋。五は尾星橋、今名は禪尼。六は冲星橋、今名は永平。七は曲星橋、今名は昇仙橋。)とあって、三番目の璣星橋の別名が建昌橋だという。

○韋皋 七四五〜八〇五。字は城武、京兆万年(現在の陝西省西安市)の人。建中四年(七八三)に朱泚しゅせいの乱が起るとそれに誘われたが従わず、奉義軍節度使を授けられた。貞元元年(七八五)に劍南西川節度使となり、その後檢校司徒兼中書令に昇進、南康郡王に封ぜられた。『旧唐書』卷百四十、『新唐書』卷百五十八に伝がある。郁賢皓『唐刺史考全編』(安徽大学出版社二〇〇〇年)に拠れば、韋皋が劍南西川節度使であったのは貞元元年(七八五)から永貞元年(八〇五)のことであるので、この話はその間の話ということになる。○建昌寺 益州に在った寺院の名。『法苑珠林』卷九十六「捨身」篇「感応縁・周沙門釈僧崖」(大正藏二二二二)に益州の記事として「有沙門僧育、在大建昌寺門、見有火光。」(沙門僧育有り、大建昌寺の門に在りて、火光有るを見る。)とある。○『戎幕閑談』 韋絢(七九六?)の撰。唐代の異聞雑事を記すが、蜀の内容が多い。唐代の政治家・李德裕の命令によって編纂され、人臣の運命についての記事が多い。『類説』などに節略本のみが残る。

#### 〔訳文〕

蜀の費鷄師は、将来のことを知り、人のためにお祓いをするのができた。邛州にいることが多く、蜀の人は皆彼を神のようにあがめていた。

ある時一人の僧が言うには、先頃双流県の保唐寺で、張二師という僧が僧房を見回っていたところ、住む者がいない僧院があるのを見つけて、そこに住もうと思った。家の者を連れてきて掃除していた際、柱の上で小さい瓶を一つ見つけた。張二師がそれを見たところ、蛇が一匹瓶の中に居るのが見えたので、瓶をひっくり返して外に出した。長さは大体一尺(三二・一cm)、斑の模様があつて、五色が皆備わっていた。杖で触ってみると、触るのに合わせて長くなつた。人々は皆驚いた。張二師はこれを挟み取り、寺の外に持って行かせた。持つて行く時、何かに触れるたびに大きくなつて一丈(三・一一m)余りになり、まるで屋根の垂木のようなつた。二人で担いでやつと持ち上がった。運ぶ者はますます恐れ、見物人はますます多くなつた。寺から二、三里(一里≒五五九・八m)程離れたが、あちこちで揺り動かすたびに大きくなるのが止まらなかつた。人々はますます怖くなり、そこでこの蛇を打ち殺してしまつた。

翌日の午の時(正午)、この寺に虹が現れた。僧が用事で臨邛にやつて来ており、費鷄師に会つてこのことを話した。費鷄師は「お前達は竜女を殺したのか。張二師とお前の寺の僧達は

皆きつと死ぬことになるだろうか。」と言った。その後、結局費鶏師の言葉通りになった。その他の靈験は書き切れない程である。結局如何なる術であるのかは分からない。

韋絢の長兄は杜元穎の従事となった。その弟妹が皆費鶏師のことを知っていたので、長兄は都に居ても費鶏師のことをよく知っていた。そこで自ら臨邛にやって来ると、費鶏師の術について尋ねた。病人がいるという知らせが来たら、費鶏師はすぐに鶏を一羽抱いて行く。その家の入り口まで来たら、その鶏にまじないをかけて家の中に入らせ、病人のところまで行かせる。鶏が家の中に入って死んだら、病人は治る。鶏が家から出てきたら、病人は起き上がることはできない。時の人々はそこで彼を費鶏師と呼んだ。

また石ころを病人の腹の上に置き、術を使い印を結んだ。その石ころが割れたら、その人も起き上がることはできない。また呪符を書くこともできた。まず呪符を焼いて灰にし、湯や水に溶かし、人にこれを飲ませる。すぐに吐き戻させると、その呪符は元の焼く前のものであった。

また町の南の建昌橋の下、その南岸には以前竜の住処の洞窟があったという。毎年いつも人に危害を与え、馬ごと溺れる者もいた。まるでわしづかみにして水中に引きずり込むかのようであった。韋阜の時、その辺りに石を数万個運び込んだが、しばらくすると石は消えて無くなってしまった。その後、道士に命じて簡策を投げ込ませて土で埋め立てたところ、やっと埋め

ることができた。それから竜の住処の洞窟は建昌寺の仏殿の下に移り、西の渡り廊下の竜が住む井戸と繋がっていた。そして建昌橋の下ではしばしば人に被害は出るものの、酷くはなくなった。役人に尋ねてみたところ、かつては人も馬もこの辺りに溺れたら、しばらくして真つ白くなった遺体が浮かんで来た。その血が吸い尽くされてから遺体が浮かび出るのだということだった。

### ○69 「汾水老姥」

〔本文〕

汾水邊有一老姥獲一赤頰鯉。顔色異常、不與衆魚同。既携歸、老姥憐惜、且奇之。鑿一小池、汲水養之。

經月餘後、忽見雲霧興起、其頰鯉即騰躍。逡巡之間、乃漸昇霄漢、其水池即竭。至夜、又復來如故。人見之者甚驚訝、以為妖怪。老姥恐爲禍、頗追悔焉。遂親至小池邊禱祝曰、「我本惜爾命、容爾生、反欲禍我耶。」言纔絕、其頰鯉躍起。雲從風至、即入汾水。唯空中遺下一珠。如彈丸、光晶射入。其老姥得之、衆人不取。

後五年、老姥長子患風、病漸篤、醫莫能療。老姥甚傷、忽意取是珠、以召良醫。其珠忽化爲一丸丹。老姥曰、「此頰鯉遺我、以救我子。答我之惠也。」遂與子服之、其病尋愈。（出『瀟湘錄』）

〔訓読〕

汾水の辺ほとりに一老姥有り一赤頰はなびらの鯉を獲たり。顔色常と異

なり、衆魚と同じからず。既に携へて歸るに、老姥憐惜し、且つ之を奇とす。一小池を驚うろち、水を汲みて之を養ふ。

月余を経し後、忽ち雲霧興起し、其の頰鯉即ち騰躍するを見る。逡巡の間にして、乃ち漸く霄漢に昇り、其の水池即ち竭く。夜に至り、又た復た来りて故の如し。人之之を見る者甚だ驚き訝り、以て妖怪と為す。老姥禍ひを為さんことを恐れ、頗る追悔す。遂に親ちから小池の辺りに至りて禱祝して曰く、「我本爾が命を惜しめ、爾が生を容ゆるすに、反つて我に禍ひせんと欲するか」と。言纒むすかに絶え、其の頰鯉躍起す。雲従ひ風至り、即ち汾水に入る。唯だ空中より一珠を遺おり下す。彈丸の如く、光晶射入す。其の老姥之を得、衆人敢へて取らず。後五年、老姥の長子風を患ひ、病漸く篤く、医能く療いす莫し。老姥甚だ傷み、忽ち是の珠を取り、以て良医を召さんと意おもふ。其の珠忽ち化して一丸丹と為る。老姥曰く、「此頰鯉我に遺り、以て我が子を救はしむ。我の恵みに答ふるなり」と。遂に子に与へて之を服せしむれば、其の病尋いで愈ゆ。

〔語注〕

○汾水 川の名。山西省寧武県に源を發し、山西盆地を貫流して黄河に注ぐ。○頰 あか。色を重ねた赤。○風 中国の伝統医学の病の一つ。外部からの良くない風を受けて発する病。六淫（風・寒・暑・湿・燥・火）の一つ。○『瀟湘録』 晩唐・柳祥撰、晩唐・李隱撰の二書がある。書目類では十巻とするが、現在は輯本一卷のみ。

〔訳文〕

汾水のほとりの老婆が赤鯉を一匹捕まえた。その色は他の魚とは全く違っていた。この鯉を持って帰ると、老姥は心引かれて珍しく思い、小さな池を掘ると水を入れて飼うことにした。

一月程経つと、突然雲や霧が沸き起り、その赤鯉が飛び上がるのを見た。しばらくすると鯉は段々空に昇っていき、池の水は無くなっていった。夜になると赤鯉は戻ってきて池も元通りになった。それを見ていた人は非常に驚き、怪異であると思つた。老婆は災いが起こることを恐れ、赤鯉を助けたことを非常に後悔した。そして自ら小池のほとりに行くと、「私は元々お前の命を惜しんで生きていることを許したというのに、かえって私に災いをもたらそうというのか。」と祈つた。言葉が終わるとすぐにその赤鯉が跳び上がった。雲と風が沸き起り、汾水へと入っていった。そして空中から珠が一つ贈られてきた。珠ははじき弓の弾のようで、放たれた輝きが周囲に突き刺さらんばかりであった。老婆はその珠を手に入れたが、他の人達は手を出そうとはしなかった。

五年後、老婆の長子が風疾を患つた。病状は段々悪化し、医者も治療することができなかった。老婆は非常に悲しみ、ふとこの珠を取り出して、それで良い医者と呼ぼうと思つた。すると突然珠が一粒の丸薬になった。老婆は「これは私が子供を助けるために、赤鯉が私に贈つたものだ。私の施しに応えたのだ。」と言つた。そして長子に服用させたとこころ、病はまな

く癒えた。

○70 「李宣」

〔本文〕

李宣、陽陽縣、縣左有潭。傳有龍居、而鱗物尤美。李之子惰學、愛釣術、日住潭上。一旦龍見、滿潭火發。如舒錦被。李子褫魄、委竿而走。蓋釣術多以前燕爲餌、果發龍之嗜慾也。(出『北夢瑣言』)

〔訓詁〕

李宣 陽陽を宰るに、県左に潭有り。伝ふるに竜居有り、而して鱗物尤も美し。李の子、学を惰り、釣術を愛し、日び潭上に住まる。一旦竜見れ、満潭火発す。錦被を舒ぶるが如し。李子褫魄せられ、竿を委てて走く。蓋し釣術多く煎燕を以て餌と爲せば、果たして竜の嗜慾を發するなり。

〔語注〕

○李宣 未詳。『旧唐書』には万年県令、屯田郎中、忠州刺史であった人物李宣の記載があるが、この人であるかは分らない。仮にこの人物であるなら、彼が忠州刺史となつたのは元和十一年(八一六)のことなので、中唐頃の人ということになる。

○陽縣 未詳。○左 ひがし。南面して左側の方向。○鱗物 魚や蛇などのうろこのある動物。○褫魄 おどろかす。○煎燕 爲餌果發龍之嗜慾也 竜が焼いた燕を好むという話は、「震沢洞」(卷四百十八「竜」部・出『梁四公記』)にも見られる。○

『北夢瑣言』二十卷。宋の孫光憲の撰。主として唐末、五代の軼事を載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従つて荊州の雲夢沢(現在の湖北省雲夢県一带)の北にいたのによつてゐる。この話は『北夢瑣言』(中華書局点校本二〇〇二年)逸文卷四に収められている。

〔訳文〕

李宣が陽陽を治めていた頃、県の東に淵があつた。ここには竜の住処があると言われており、立派な鱗ある生き物が住んでいた。李宣の子は学問をせずに釣りを好み、毎日淵の辺りに出かけていた。ある日突然竜が現れて淵は火の海となり、錦の布団を広げたかのようにあつた。李宣の子は魂消て、竿を放り投げて逃げ出した。思うに釣りでは焼き燕を餌とすることが多いので、竜の食欲をそそつたのだろう。

○71 「濠陽湫」

〔本文〕

彭州蒙陽縣界、地名清流、有一湫。郷俗云、「此湫龍與西山慈母池龍爲昏、每歲一會。」

新繁人王叔乃博物者、多所辨正、嘗鄙之。(嘗鄙之原作當鄙。據北夢瑣言(雲自在龕叢書本)改。)秋雨後經過此湫、乃遇西邊雷雨冥晦、狂風拔樹。王叔繫馬障樹而避。須臾、雷電之勢、止於湫上、倏然而霽、天無纖雲。詰彼居人、正符前說也。

雲安縣西有小湯溪。土俗云、「此溪龍與雲安溪龍爲親。」此乃

不經之談也。或一日、風雷自小湯溪、循蜀江中而下。(下原作不。據陳校本改。)至雲安縣、雲物回薄、入溪中。疾電狂霆誠可畏。有柳毅洞庭之事、與此相符。小湯之事自目睹。(原闕出處。明鈔本作出『北夢瑣言』)

〔訓詁〕

彭州蒙陽縣の界、地の名は清流に、一湫有り。郷俗に云ふ、「此の湫の竜と西山慈母池の竜と昏を為し、毎歳一たび会ふ」と。

新繁の人王叡は乃ち博物の者にして、辨正する所多く、嘗て之を誦しむ。秋雨の後此の湫を経過し、乃ち西辺に雷雨冥晦し、狂風樹を抜くに遇ふ。王叡馬を繋ぎ樹を障にして避く。須臾にして、雷電の勢、湫上に止まり、倏然として霽れ、天に織雲無し。彼の居人に詰ふに、正に前説に符ふなり。

雲安縣の西に小湯溪有り。土俗に云ふ、「此の溪の竜と雲安溪の竜と親と為る」と。此乃ち不經の談なり。或いは一日、風雷小湯溪より、蜀江中に循ひて下る。雲安縣に至り、雲物回薄し、溪中に入る。疾電狂霆誠に畏るべし。柳毅洞庭の事有り、此と相符ふ。小湯の事自ら目睹す。

〔語注〕

○彭州 現在の四川省成都市彭州市一带。○蒙陽縣 現在の四川省雅安市名山区。○清流 川の名。四川省内江市の東南。○湫池。水たまり。○慈母池 未詳。○昏 結婚。「婚」に同じ。○新繁 県の名。現在の四川省成都市新都区。○王叡 元

和年間(八〇六〜八二〇)以降の人に『炙轂子』三十卷を著した李叡がいるが、この人物であるかどうかは分からない。博士の士として知られ、前蜀・杜光庭『神仙感遇伝』巻一「王叡」に「進士王叡、漁經獵史之士也。孜孜矻矻、窮古人之所未窮、得先儒之所未得、著『炙轂子』三十卷。六經得失、史冊差謬、未有不鍼其膏而藥其育矣。所有二種之篇、釋諭之說、則古人高識洞鑑之士、有所不逮焉。」(進士王叡は、漁經獵史の士なり。孜孜矻矻として、古人の未だ窮めざる所を窮め、先儒の未だ得ざる所を得、『炙轂子』三十卷を著す。六經の得失、史冊の差謬、未だ其の膏に鍼して其の育に藥せずんば有らず。有する所の二種の篇、釈諭の説、則ち古人高識洞鑑の士も、逮ばざる所有り。)とある。○雲安縣 県の名。現在の重慶市雲陽県。○小湯溪 湯溪の支流か。湯溪は現在の重慶市雲陽県東北を流れる湯溪河のこと。『華陽国志』巻一「巴志」に「胸忍縣、(中略)：有巴郷名酒、靈壽木橘圃、鹽井、靈龜。湯溪鹽井、粒大者方寸。」(胸忍県、(中略)：巴郷の名酒、靈壽木の橘圃、塩井、靈龜有り。湯溪の塩井は、粒大なる者方寸。)とある。○雲安溪 未詳。雲安縣を流れる谷川の名か。○不經之談 根柢が無く通常の理屈に合わない話。『史記』巻七十四「孟子荀卿列伝」に「乃深觀陰陽消息而作怪迂之變、終始、大聖之篇十餘萬言。其語闕大不經、必先驗小物、推而大之、至於無垠。」(乃ち深く陰陽の消息を觀て怪迂の變、終始大聖の篇十餘萬言を著す。其の語闕大不經にして、必ず先づ小物を驗し、推して之

を大にし、無垠むぎんに至る。」とある。○蜀江 長江のうち、蜀（現在の四川省）の中を流れる部分の名。○回薄 ぐるぐる回る。

○柳毅洞庭之事 いわゆる「柳毅伝」のこと。「太平広記」訳注 一巻四百十九「龍」二（上）（下）一（『国語国文学研究』第四十五号・第四十六号 二〇一〇年・二〇一一年）を参照。

唐代には「柳毅伝」の物語はよく知られていたようで、例えば「伝奇」「蕭曠」（『広記』巻三十一「神」部所引）には「曠因語織綃曰、近日人世或傳柳毅靈姻之事。有之乎。女曰、十得其四五爾。餘皆飾詞。不可惑也。」（曠因りて織綃に語りて曰く、「近日 人世に或いは柳毅靈姻の事を伝ふ。之有るか」と。

女曰く、「十に其の四五を得たるのみ。余りは皆飾詞なり。惑ふべからざるなり」と。）とあり、魯迅は『唐宋伝奇集』「稗刃小綴」で、同じく唐代小説「靈応伝」は「柳毅伝」の影響を強く受けていると指摘している。また明・胡應麟『少室山房筆叢』巻三十六「西綴遺」中に「唐人小説如柳毅傳書洞庭事、極鄙誕不根、文士亟當唾去、而詩人往往好用之。夫詩中用事、本不論虛實。然此事特誑而不情、造言者至此亦橫議可誅者也。何仲默每戒人用唐宋事、而有舊井潮深柳毅祠之句、亦大鹵莽。今特拈出、爲學詩之鑑。」（唐人小説の柳毅書を洞庭に伝ふる事の如きは、極めて鄙誕不根にして、文士 亟よみやかに当に唾去すべきに、而るに詩人 往往にして好みて之を用ふ。夫れ詩中に事を用ふるは、本虚実を論ぜず。然れども此の事 特に誑いっばりて情あらず、言を造る者 此に至りて亦た横議して誅すべき者な

り。何仲默 毎に人の唐宋の事を用ふるを戒むるに、而るに「旧井潮深し柳毅の祠」の句有るは、亦た大いに鹵莽なり。今（特に拈出し、詩を学ぶの鑑と爲す。）とあり、批判的ながらも「柳毅伝」が後世の詩詞の題材にもなったことが指摘されている。○『北夢瑣言』二十卷。宋の孫光憲の撰。主として唐宋、五代の軼事を載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従って荊州の雲夢沢（現在の湖北省雲夢県一帯）の北にいたのによっている。この話は『北夢瑣言』（中華書局点校本 二〇〇二年）逸文卷四に収められている。

#### 〔訳文〕

彭州蒙陽県の泉境、清流というところに池が一つある。その土地ではこの池の竜と西山慈母池の竜が結婚し、毎年一回会うと言われている。

新繁の人王叡は博学で物事の誤りを正す事が多く、つねづねこのような話を馬鹿にしていた。秋雨の後にこの池に通りかかった時、西の方が雷雨で真つ暗になり、大風で樹が倒れるのに出くわした。王叡は馬を繋いで樹を盾にしてやり過ごした。しばらくすると雷の勢いが収まって池の上に留まったかと思うと、突然晴れ上がって空には薄雲すら無くなった。土地の住人に聞いてみると、前の話とぴったり符合しているのだった。

雲安県の西に小湯溪がある。当地ではこの谷川の竜と雲安溪の竜は親戚になったと言われている。これは根拠の無い話である。ある日、風と雷が小湯溪から蜀江に沿って降っていった。

雲安県まで行くと、雲はぐるぐると回って谷川の中に入っていた。素早く激しい雷はまことに恐るべきものであった。柳毅が洞庭湖に婿入りしたという話はこの話と符合する。小湯溪のことは私がこの目で目撃したものである。

### ○72 「鹽井龍」

〔本文〕

王蜀時、夔州大昌鹽井水中往往有龍。或白或黃、鱗鬣光明。攪之不動、唯沮（沮原作祖。據北夢瑣言改。）沫而已。彼人不以爲異。近者柝歸永濟井鹵槽、亦有龍蟠、與大昌者無異。識者曰、「龍之爲靈瑞也、負圖以昇天。今乃見於鹵中、豈能雲行雨施乎。」

雲安縣漢成宮絕頂、有天池深七八丈。其中有物如蜥蜴、長咫尺、五色備具、躍於水面。象小龍也。有高遇者爲刺史、詣宮設醮、忽浮出。或問監官李德符曰、「是何祥也。」符曰、「某自生長於此、且未常見漢成池中之物。高既無善政、詔佛佞神、亦已至矣。安可定其是非也。」

夷陵清江有狼山潭、其中有龍。土豪李務求禱而事之。往見錦（江有狼山潭至往見錦二十一字原闕。據明鈔本、陳校本補。）衾覆水、或浮出大木、橫塞水面。號爲龍巢。遂州高棟溪潭、每歲龍見。一如狼山之事。（出『北夢瑣言』）

〔訓読〕

王蜀の時、夔州大昌鹽井水中に往往にして竜有り。或いは白或いは黄、鱗鬣光明あり。之を攪すも動かさず、唯だ沫を沮らすのみ。彼の人以て異と爲さず。近き者は柝歸永濟の井鹵槽も、亦た竜の蟠る有り、大昌の者と異なる無し。識る者曰く、「竜の靈瑞爲るや、図を負ひて以て天に昇る。今乃ち鹵中に見れば、豈に能く雲行き雨施されんや」と。

雲安縣漢成宮の絶頂に、天池の深さ七八丈なる有り。其の中に物の蜥蜴の如き有り、長咫尺、五色備に具はり、水面に躍る。小竜に象るなり。高遇なる者有り、刺史と爲り、宮に詣り醮を設くれば、忽ち浮き出づ。或いは監官李德符に問ひて曰く、「是、何の祥なるか」と。符曰く、「某、此に生長してより、且つ未だ常て漢成池中の物を見ず。高既に善政無く、仏に詣りひ神に佞るに、亦た已に至る。安くんぞ其の是非を定むべけんや」と。

夷陵清江に狼山潭有り、其の中に竜有り。土豪李務禱りて之に事へんことを求む。往きて見るに錦衾水を覆ひ、或いは大木を浮き出だし、横に水面を塞ぐ。号して竜巢と爲す。遂州の高棟溪潭、毎歲竜見はる。一に狼山の事の如し。

〔語注〕

○王蜀 五代十国期の王朝の一つ、前蜀（八九一〜九二五）のこと。王を姓とするので、王蜀という。西川節度使王建が東川、山南西道、荆南の一部を確保、九〇七年の唐滅亡の折には檄を

飛ばして諸勢力を糾合しようとしたが応ずる者無く、自ら帝位について国号を蜀とした。後主王衍の時、後唐の莊宗に滅ぼされる。○夔州 州の名。現在の重慶市北東部一帯。○大昌 県の名。現在の重慶市巫山原大昌鎮。○鱗鬣 うろことひれ。「鬣」は魚や竜の頸の横にある小ひれ。○秭歸 現在の湖北省宜昌市秭歸県。○永濟 河北省邯鄲市館陶県付近。○井廂槽 「廂」は岩塩、井塩など、海以外から採れる塩。井塩を作るために塩井の水を溜める貯水槽のことか。○龍之爲靈瑞也負圖以昇天 伏羲の時、黄河から出た竜馬の背に易の卦の元になる図形が描かれていたという。『尚書』顧命に「大玉、夷玉、天球、河圖、在東序。」（大玉、夷玉、天球、河図、東序に在り。）とあり、孔安国伝に「伏羲氏王天下、龍馬出河。遂則其文、以畫八卦。謂之河圖。」（伏羲氏 天下に王たりしとき、竜馬 河より出づ。遂に其の文に則り、以て八卦を画く。之を河図と謂ふ。）とある。○雲安縣 県の名。現在の重慶市雲陽県。○漢成宮 「漢成」は山の名。漢城山ともいう。現在の重慶市雲陽県の東北にある。この山にある廟か道観の名か。○高邁 未詳。新旧『五代史』にも見えない。○醮 祭壇を設けて祀ること。○監官 唐代、国子監の祭酒、司業、丞、主簿の総称。○李德符 未詳。新旧『五代史』にも見えない。○夷陵 県の名。現在の湖北省宜昌市。○清江 川の名。夷水。湖北省南西部を流れる河川で、長江の支流。○狼山潭 未詳。「狼山」は「康狼山」或いは「狼山」に同じか。夷水はこの山に源流を発する。『水経注』「沔水

注」に「夷水導源中廬縣界康狼山、山與荆山相隣。其水東南流、歷宜城西山。謂之夷溪。」（夷水は源を中廬県の界 康狼山に導き、山と荆山と相隣る。其の水 東南流し、宜城西山を歴。之を夷溪と謂ふ。）とある。また『水経注』「夷水注」に「夷水、出巴郡魚復縣江。夷水、即狼山清江也。」（夷水、巴郡魚復県より出づるの江。夷水、即ち狼山の清江なり。）とある。○李務 未詳。新旧『五代史』にも見えない。○遂州 州の名。現在の四川省遂寧市一帯。○高棟溪潭 未詳。○『北夢瑣言』二十卷。宋の孫光憲の撰。主として唐末、五代の軼事を載せている。北夢の称は光憲が初め高季興に従って荊州の雲夢沢（現在の湖北省雲夢県一帯）の北にいたのによつてゐる。この話は『北夢瑣言』（中華書局点校本 二〇〇二年）逸文卷四に収められている。

#### 〔訳文〕

前蜀の時、夔州大昌の塩井の水中にしばしば竜が現れた。白や黄色をしており、鱗も鱗も光り輝いていた。これをつついてみても動かず、泡を吐くばかりであった。当地の人は不思議なものとは思わなかった。近隣では秭歸や永濟の塩井の貯水槽でも竜がとぐろを巻くことがあり、大昌のものと同様であった。物知りな人が言うには「神靈なる瑞祥としての竜は、河図を背負つて天に昇るものである。今塩井などに現れてしまったものは、どうして雲を呼んだり雨を降らせたりなどできようか。」とのことだった。

雲安県漢成宮のある山の頂に天池という深さ七、八丈（一丈三、一一m）の池があり、その中に蜥蜴のようなものが居た。長さはとても短く、五色が皆備わっており、水面を泳ぎ回っていた。小さい竜に似ていた。高遇という人物が刺史となり、漢成宮を訪れて祭祀を行ったところ、この小さい竜が突然浮かんで来た。監官の李徳符に「これはいかなる祥瑞であろうか。」と尋ねると、李徳符は「私がここで生まれ育ってから、漢成池の中でそんなものは見たことが無い。そなたは善政を敷くこと無く、神仏におもねっていたのに、このようなものが現れた。どうしてその是非を見定めることができようか。」と答えた。

夷陵の清江に狼山潭があり、その中に竜がいる。土地の豪族である李務はそれに祈ってお仕えしたいと思っていた。行ってみると、錦の布団が水面を覆っていたり、大木が浮かんでいたりと、水面がでたらめに塞がれていた。これを「竜巢」と呼ぶ。遂州の高棟溪潭では毎年竜が現れるが、狼山と全く同じである。

### ○73 「尹皓」

〔本文〕

朱梁尹皓鎮華州。夏將半、出城巡警。時蒲雍各有兵戈相持故也。因下馬、於荒地中得一物如石、又如卵。其色青黑、光滑可愛。命左右收之。又行三十里、見寺院佛堂。（堂宇原闕。據明鈔本補。）遂眞於像前。

其夜雷霆大震、猛雨如注、天火燒佛堂。而不損佛像。蓋龍卵也。院外柳樹數百株、皆倒植之。其卵已失。（出『玉堂閑話』）

〔訓読〕

朱梁の尹皓華州に鎮たり。夏將に半ばならんとするに、城より出でて巡警す。時に蒲雍各おの兵戈有りて相持するが故なり。因りて馬より下るに、荒地中に於いて一物の石の如く、又た卵の如きを得たり。其の色青黒にして、光滑愛すべし。左右に命じて之を取めしむ。又た行くこと三十里にして、寺院の仏堂を見る。遂に像の前に眞く。

其の夜雷霆大いに震ひ、猛雨注ぐが如く、天火仏堂を焼く。而るに佛像を損なはず。蓋し竜卵ならん。院外の柳樹數百株、皆倒しまに之を植う。其の卵已に失ふ。

〔語注〕

○朱梁 五代最初の王朝、後梁（九〇七〜九二二）のこと。朱を姓とするので、朱梁という。軍閥の首領朱全忠が九〇七年に唐の昭宣帝に禪讓させて建国した。都是開封。激しい後継者争いの末、三代十六年の短命に終わった。○尹皓 未詳。『新五代史』『旧五代史』それぞれ数箇所、後梁の武將としてその名が見える。『旧五代史』卷九「梁書・末帝紀」の貞明五年（一九一九）の記事には「三月己卯、以華州感化軍留後尹皓爲華州節度使、加檢校太保、同平章事。」（三月己卯、華州感化軍留後尹皓を以て華州節度使と爲し、檢校太保、同平章事を加ふ。）とあるので、この話はそれ以降のことか。○華州 現在の西安市

附近。○時蒲雍各有兵戈相持故也 蒲は蒲州、現在の山西省蒲州県附近。古來、河北が南北に分裂した際には必ず争奪の的となり、長安に根拠を置いた者はまずこれを確保して、山西からの圧力に対抗しなくてはならなかった。雍は唐の京兆府、長安のこと。現在の陝西省西安市附近。当時は後梁と李克用の長子李存勗（後の後唐の莊宗）の晋が熾烈な領土争いを繰り広げていた。ここではそのことを言うか。○『玉堂閑話』 五代の小説集。作者は後周の王仁裕または范質とする二説がある。原書はすでに佚して伝わらないが、その内容は『太平広記』に百六十一條引用されている。

〔訳文〕

後梁の尹皓が華州を治めていた頃のこと。夏が半ばを過ぎようとする頃、城を出て見回りをしていた。当時蒲州と雍州ではそれぞれ軍備を整えていたからである。そこで馬から下りると、荒地で石のような、卵のような物を見つけた。その色は青黒く、つやつやとして心引かれるものがあったので、従者に命じて拾わせた。さらに二、三十里（一里≒五五九、八m）行くと、村の寺の仏堂があった。そこで拾った物を仏像の前に置いた。

その夜雷が鳴り響き、水を注ぎかけるような雨が降り注ぎ、天より降った火が仏堂を焼いた。しかし仏像は無事だった。おそらく先のは竜の卵だったのであろう。寺の外の柳数百株は、皆ひっくり返っていた。その卵はもう無くなっていた。

（続）

元原稿製作者・編集担当者

◎○屋敷 信晴

項 青

○福本 睦美

西田 則子

山下 宣彦

山田 尚子

平山 千加子

寺岡 真佐子

権原 誠

（○は編集担当者、◎は編集責任者）